

## 和歌：文苑

著者	松露生，江楠生，蘆月
雑誌名	龍南會雜誌
巻	5 4
ページ	5 1 - 5 2
発行年	1897-03-13
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4790">http://hdl.handle.net/2298/4790</a>

戀ひわびて  
雪見がてらと

たづね來つれど  
我はこたへん。

君問はし  
水

敗  
艇  
親友會眞 錦 浦 生

畫津の湖畔彩霞たなびき、

神機一髮他を顧るに遑わらず、

幾萬の士女雲の如く群る。

歡聲湧が如く砲復た轟く。

綺羅錦繡花を欺くの装、

決勝線上敗艇空しく漂ひ、

水底相映す幾十の旗。

壯士擢を擲ちて天の一方を睨む。

忽然一聲號砲轟き、

「此怨此恥雪かすして息まんや、  
勾踐尙知る會稽の恥。  
日東男子豈此慨莫からんや、  
來れ敗軍の壯士何を涙を拂て起たさる。」

三艘の端艇波を截て飛ぶ。

晚霞蒼然四山を罩め、

艇舳相並んで優劣定め難し。

春月高く懸る熊城の天。

水禽睡を攪して驚き叫び、

湖邊蕭々人全く絶え、

岸上稠人手を拍て呼び、  
漕手愈々勇み波益々躍る。

悄然手を拱ひて歩遅々たり。

大喪に逢ひ奉りて  
松 露 生

久方のくもるに月のかくるひてひとの涙を去くれ初ける

ぬは玉のやみちにまよふ心かな月の光の雲かくれして

筑後の川上にいせさせし人のいさををたへて

川上の水せき分て千町田にかけしいさをは世々にあせめや

全

ゆたねまく田子はたへん萬代に水せさいれま人のほまれを

青

江楠生 蘆花の天月

山の名も青葉の峰のなつ木立見ゆるかさりは緑なりけり

黄

はるくどこ金のむしろしきにけり春野のすな今さかりにて

赤

夕日影てりそふ山のもみち葉はからくれなるの錦なりけり

白

野に山に見渡すかさり雪つみて世は白妙になりにけるかな

黒

する墨の色よりもこく黒髪の峯にかゝれる夕立の雲

松影映水

池の面に影をうつして君か代の千年を見する庭の松か枝

小波もさわかぬ水に常盤なる千代松か枝の影そうつれる